

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

2010年度五大学卒業設計合同公開講評会グランプリ

大島 碧

◆大学院美術研究科修士課程建築専攻1年

藝大では学部3年からトム・ヘネガン教授の指導を受けています。イギリス出身のヘネガン先生は、まさに英国紳士というように器が大きな方で、お父さんのように慕わせていただいています。自由で明るい研究室の雰囲気もすばらしいです。

藝大の建築科は、工学系ではない美術系の建築科であることが大きな特色です。私自身、美術として、意匠としての建築に興味を抱いて藝大を受験しました。子供のころから美術の専門教育を受けてきたわけではなかったので大きなチャレンジでしたが、今は藝大に進んでよかったと思っています。

私が建築に魅力を感じる理由のひとつとして、設計者と施主の間に、ほかの芸術領域にはない濃密な関係性が求められるという点があります。こういう社会的な役割は、用途による違いはあるものの、建築のとても重要な問題をはらんでいると思います。実際の施工を伴わない大学の課題

でも、こういう建築の役割を考えながら設計に取り組んでいくつもりです。

今回私がグランプリをいただいたのは、2010年度五大学卒業設計合同公開講評会です。この公開講評会は今回が5回目で、これまでは国内の3大学、東京藝術大学と東京大学、東京工業大学の卒業設計を対象にしてきましたが、今回から、中国の精華大学と韓国のソウル大学が招待され、日本の卒業設計講評会としては初の試みとなったそうです。

私の卒業設計は「図書を巡る庭」といい、有栖川宮記念公園の園内に建つ東京都立中央図書館を解体し、再構築するというものでした。有栖川宮記念公園は東京麻布という都心にありながら、豊かな自然と起伏のある立地を生かして、日本の伝統的な回遊式庭園を展開しています。モダンな外観の図書館は公園を登りきった平地に建っているのですが、庭園と景観的な結びつきがあまり感じられな

いことを長い間残念に思っていました。そこで、図書館が庭園を回遊しながら一体化するように、一連の帯状の空間が園内を巡るような設計を考えたのです。

建築は周囲の環境や景観と切り離せないものです。しかし、周囲とは無関係にデザインされた建物も少なくありません。私は一棟の建物を設計するというより、個別の土地と深くかわりあい、強く結びつくような空間を考えていきたいと思っています。

もともと私は街を歩くのが好きで、東京でも長い距離を歩いて移動することがあります。東京を歩いていると、街と街が地続きでも、別の街に足を踏み入れ、境界を越えたとわかる明らかな印象の変化があります。計画的につくられ、区画化された欧米の大都市とは違い、ゆるやかな「景」の連なりが都市を形づくっている。東京は連作で綴られた短篇小説に似ているのかもしれない。



卒業設計作品「図書を巡る庭」。左：全体イメージ 右：窓・内観

おおしま・みどり

1987年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部建築科卒業。2010年度JIA卒業設計コンクール東京大会審査員特別賞受賞。建築科の卒業設計作品「図書を巡る庭」で2010年度「五大学卒業設計合同公開講評会」グランプリを受賞。



第79回日本音楽コンクール（2010年10月）
声楽部門本選での歌唱 ©毎日新聞社提供

ぼく・てるみ

1977年千葉県生まれ。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻修了。学部在学時、安宅賞受賞。藝大バッハカンタータクラブに所属し、小林道夫氏の薫陶を受ける。声楽を佐々木正利、朝倉蒼生、佐竹由美、佐々木典子の各氏に師事。2004年、第15回友愛ドイツ歌曲（リート）コンクール第2位。2006年、第14回日仏声楽コンクール第1位ならびに日本歌曲賞受賞。2007年、JT主催「期待の音大生によるアフタヌーンコンサート」に出演。2008年、第77回日本音楽コンクール入選。2010年第79回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第1位入賞、併せて岩谷賞（聴衆賞）、木下賞受賞。



第79回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第1位

朴 瑛 実

◆大学院音楽研究科博士後期課程音楽専攻（声楽）3年

私が本格的に声楽に取り組みはじめたのは、今から10年前、藝大受験を決めた頃からです。音楽そのものを始めた時期は5歳の頃で、中学3年生までピアノを続けた後、高校時代には合唱部に所属しました。藝大入学前に一般の私立大学でドイツ文学を学んでいたのですが、合唱がとても好きであったため、そこでも50年以上の歴史をもつ合唱サークルに入り活動していました。そのサークルはルネサンス時代やバロック時代の教会音楽を扱うことが大きな特色で、そこでの活動はとても面白く充実していたため、合唱を通じて自然とソロ演奏に対する意欲も湧いてきました。

藝大音楽学部は、周りが優秀な人ばかりという環境なので、ほんとうに日々大きな刺激を受けています。藝大では佐々木典子先生の指導を受けており、第一線で活躍している音楽家ならではの知性や音楽に向き合う真摯な姿勢など、目標とするのが憚られるくらい素晴らしい先生です。

日本音楽コンクールの声楽部門は、1

年おきに、「歌曲」と「オペラ・アリア」の審査がおこなわれます。第1予選、第2予選と進み、本選では15分以内に2か国語以上（うち1曲は日本語）の歌曲を歌うことが義務づけられています。私は2008年度（第77回）にも挑戦したのですが、そのときは本選に残ったものの、入選止まりでした。

今回、本選では高田三郎の「くちなし（《ひとりの対話》から）」と、フランツ・リストが作曲したドイツリートを4曲、「私の歌には毒がある」「祝福あれ、あの日に（《ペトラルカの三つのソネット》から第2曲）」「それは素晴らしいことに違いない」「すべての頂に憩いがある」を歌いました。自身も名だたるピアニストだったリストは、超絶的な技巧を要するピアノ曲で有名ですが、90曲におよぶ魅力的な歌曲も作曲しています。そして今年（2011年）がリストの生誕200年にあたることから、それにちなんでプログラムを組んだという面もあります。

不本意なことなのですが、本選の当日、風邪をこじらせ体調が最悪でした。最後

まで歌いきれば悔いはないという気持ちで審査に臨んだので、第1位を受賞したのがほんとうに信じられませんでした。また、「日本歌曲がよかった」「プログラムの選曲がよかった」という評判を聞き、意外で驚きましたが、とてもうれしい感想でした。

今年は3月から受賞者発表演奏会で全国をまわりました。3月11日に起きた東日本大震災のため、一部の公演が中止になったのですが、さまざまなプログラムに取り組んだつもりです。今回の受賞を励みに、これからは歌曲の演奏力を今以上に高めるとともに、これまで取り組まなかったオペラなどの分野にも積極的に幅を広げていきたいと考えています。2年前に藝大奏楽堂でおこなわれた「コンサート・オペラ」において、ヘンデルの後期オペラの傑作《アリオダンテ》で重要な役をいただいたことがあります。もともと古楽をきっかけに声楽の世界に飛び込んだものですから、この方面も極めていきたいと思っています。

田村友一郎

◆大学院映像研究科博士後期課程映像メディア学専攻2年

日本大学芸術学部写真学科を卒業したあと、約4年間出版社でカメラマンとして働いていました。大学時代は、ジェフ・ウォールやベッヒャー以降のトーマス・シュトルート、トーマス・ルフなどのドイツ写真の潮流に惹かれましたが、「内面性」を求める日本の写真界には馴染めず、写真にはあまり興味をもてずにいました。ですから、卒業後は積極的にいわゆる作品というものを制作していなかったように思います。

そのような中、自分が仕事をしていた雑誌で佐藤雅彦先生の「考えの整とん」という連載が始まり、肩書に「東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻教授」と記されているのを見つけたのです。この連載では、日常を生きるなかで新しい法則を見つける、あるいはものの見方を変えることによって新しい発見がある、ということが書かれており、とても刺激になりました。そこで、こういう領域に興味を持ち藝大の映像研究科を受験しました。

藝大入学後、最初はグループ作業がほとんどで、個の表現よりもパブリックな表現をめざすことを徹底的に叩き込まれたよ

うに思います。メディアリテラシーとはどういうことかということです。このことは、いまの多くの制作活動に大きく影響を与えていると思います。

ばくの場合、メディアアートや映像と呼ばれる領域で作品制作に取り組みながらも、常に写真をよりどころにしているという意識があります。映像の歴史をたどると、絵画、写真、映画という流れで発展してきたように見えますが、写真というメディアが映像という分野の生まれる大きなきっかけとなっています。しかし、それにもかかわらず、写真が映像に対して果たす役割や意味は、未だに大きな謎に包まれているのではないかと考えています。さらに、ばくは、自己表現としての写真よりも「自分が撮らない写真」や「撮影者の存在を消した写真」に興味がありました。文化庁メディア芸術祭アート部門で優秀賞を受賞した「NIGHTLESS」も、そういう関心から生まれた作品です。

「NIGHTLESS」は、Google マップのストリートビュー画像を組み合わせて構成した、一種のロードムービーです。インターネット

の世界に存在する世界各地の風景を、1枚ずつスクリーンショットで保存し、映像編集ソフトでつなぎ合わせた「机上の旅」。ばくはどこへも出かけず、撮影も一切していません。ストリートビューがおもしろいのは、単なる記録であり、芸術性のかけらもない画像だからです。しかも、ストリートビューの中には偶然に写真に撮られてしまった人々が写し込まれたりもしています。ですから、そこに制作者であるばくの意思は存在していないといってもよいかもしれません。

また、「NIGHTLESS」には、映画のように会場や劇場に座って観賞するのではなく、スクリーンの前に自動車を置き、運転席や助手席から観るという、インスタレーションというべき鑑賞法もあります。フロントガラス越しに観た風景は、ドライブ・イン・シアターで映画を観るという行為を想起するかもしれません。また、今後はストリートビューに限らず、タイトルにある「夜が訪れない」という概念をより突き詰めていこうと思っています。ですから、それは、必ずしも今までの映画という形をとらないものになるかもしれません。



たむら・ゆういちろう

1977年富山県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。東京藝術大学大学院映像研究科修士課程メディア映像専攻修了。2006年写真作品《IN PORTRAITS》にて「Esquire Digital Photograph Awards 2006」審査員特別賞受賞。主な参加展示に「Pèlerinage + prière」(Gallery LU/フランス、ナント)、「佐藤雅彦ディレクション“これも自分と認めざるをえない”展」(21_21 DESIGN SIGHT/東京、2010年)、2010年度、映像作品「NIGHTLESS」にて第14回「文化庁メディア芸術祭 アート部門」優秀賞受賞。第57回オーバーハウゼン国際短編映画祭、第3回恵比寿映像祭、広島市現代美術館などで上映。



上：「NIGHTLESS」の1シーン。
下：藝大横浜校地における修了展示での
インスタレーション